

シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における「自己消去」  
——亡霊、理性、カトリシズム

---

松崎 翔斗

---

序

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の『船出』 (*The Voyage Out*) の中で、主人公レイチェル・ヴィンレイス (Rachel Vinrace) は以下のように自分の在り方を披歴する。

‘A girl is more lonely than a boy. No one cares in the least what she does. Nothing’s expected of her. Unless one’s very pretty people don’t listen to what you say. . . . And that is what I like,’ she added energetically, as if the memory were very happy. ‘I like walking in Richmond Park and singing to myself and knowing it doesn’t matter a damn to anybody. I like seeing things go on—as we saw you that night when you didn’t see us—I love the freedom of it—it’s like being the wind or the sea.’ (203)

レイチェルは孤独を好む。それは孤独が彼女に観察者、というよりもむしろ窃視者のように「事物が進んでゆくさまを見る」(‘seeing things go on’) 機会を与えるからである。彼女が窃視者であるとき、彼女の存在は「風や海」(‘the wind or the sea’) といった外界の事物に溶け込んでゆく。この自己を消去する様態は、ウルフの文脈では、「全個性を溶解させ、死のようなトランス状態へと沈み込む誘惑」(‘the temptation to dissolve all individuality and sink into a deathlike trance’, Naremore 55) と言える。

しかし、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ヴィレット』 (*Villette*) の文脈においては、ルーシー・スノウ (Lucy Snowe) のレイチェルのような他者から身を引いた在り方は、むしろ「埋葬された生」(‘The Buried life’, Gilbert and Gubar 403) と言ったほうがやはり良いのだろうか。この「埋没した／埋葬された生」とは、ギルバート／グーバー (Gilbert and Gubar) が『屋根裏の狂女』 (*Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-*

2 シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における「自己消去」  
——亡霊、理性、カトリシズム

*Century Literary Imagination*, 1979) 所収の「ルーシー・スノウの埋葬された生」(“The Buried Life of Lucy Snowe”) という論稿において、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) の「埋もれた生活」 (“The Buried Life”) という詩に言及して使用した語である。<sup>1</sup>この「埋葬された生」に対する『ヴィレット』のルーシーの視点とアーノルドの詩の視点の差異について、ギルバート／グーバーは以下のように述べる。

Both Arnold and Lucy describe the discrepancy between a dumb, blank life and the hidden, passionate center of being. But the difference between the two views is instructive. For while Lucy’s repression is a response to a society cruelly indifferent to women, Arnold claims that the genuine self is buried in all people. (401)

男性と女性とで自己の在り方に対して異なる見解がある。ルーシーの場合は「埋葬された生」とは女性に無慈悲な男性社会に対する一反応としての自己の「抑圧」 (“repression”) であり、アーノルドにとってのそれは遍く人々の中に埋没／埋葬された「真の自己」 (“the genuine self”) である。つまり、ルーシーの場合、「埋葬された生」は否定なものであり、アーノルドの場合は肯定的なものである。ギルバート／グーバーは、この自己埋没の犠牲に遭った女性たちをブロンテがどのように描いたか、続けて以下のように言及する。

Thus, where the male Romantics glorified the “buried life” to an ontology, Brontë explores the mundane facts of homelessness, poverty, physical unattractiveness, and sexual discrimination or stereotyping that impose self-burial on women. While male poets like Arnold express their desire to experience an inner and more valid self, Brontë describes the pain of women who are restricted to just this private realm. Instead of seeking and celebrating the buried self, these women feel victimized by it; they long, instead, for actualization in the world. (402)

ブロンテは強制される自己埋没から逃れて、本来の自分を曝け出し、露出す

---

<sup>1</sup> ‘buried’ は「埋められた」や「埋葬された」などの意味を内包する。本稿では、死の世界から生の世界への復活の意味も含むことができる「埋葬された生」を ‘the buried life’ の日本語訳としたい。

ることを目指す女性を描き、そのような女性像を希求した。たしかに、後に詳述するが、『ヴィレット』では、ムッシュ・ポール・エマニュエル (M. Paul Emanuel) の手助けにより、この目論見が実現されているように思える。

『船出』において、レイチェルは自ら進んで「見る者」になるために「埋葬された生」を欲望した。一方で、シャーロット・ブロンテのルーシー・スノウにとって、そのような生とは男性優位のヴィクトリア朝社会において強制されたものである。主体（ルーシーあるいは他の登場人物）はレイチェルのように自身を他者の視線から（非）意図的に隠すあるいは消去するという点で、この「埋葬された生」はむしろ「自己消去」と呼ばれるべきではないかというのが私の提案である。<sup>2</sup> 従って、本稿において私が示唆したいのは『ヴィレット』におけるルーシーの「自己消去」に対する移ろいゆく姿勢である。というのも、ルーシーは初めの方は「自己消去」に従順であったが、後に反抗的な姿勢を示すからである。本作品における「自己消去」としては、レイチェルのような窃視者の側面に加えて、抑圧した感情、宗教が絡んでいることも指摘していきたい。

また、本稿のもう一つの目的は、「自己消去」と呼ばれるべき現象がウルフ作品だけではなく、他の作家の作品にも見られることを提示することである。つまり、「自己消去」という観点での読みの可能性を示唆することである。

## I 窃視者／亡霊としてのルーシー

レイチェルのように他者から身を隠し、他者の生を見ようとするルーシーの窃視者的傾向は、「静かな人目の付かないところに引っ込んで、そこで私は見られることなく見ることができた」(‘*Withdrawing to a quiet nook, whence unobserved I could observe*’, 156)、「新しい物事を傍観するという穏やかな欲望」(‘*the calm desire to look on new things*’, 120)、「子供部屋の見張り塔」(‘*[her] watchtower of the nursery*’) からの「フォセット街という小さな世界」(‘*[the] little world of the Rue Fossette*’) の「観察」(‘*[her] observations*’, 83)、といった彼女の語りを考慮すれば明らかである。<sup>3</sup> 特に、ドクター・ジョン (Dr Jhon) がグラハム・ブレトン (Graham Bretton) その人であると気づいた際、彼にそのことを告白せず、「自身にその問題を持っておく」(‘*to keep the matter to myself*’,

<sup>2</sup> レイチェルの「自己消去」にかんする読解については、松崎の「ヴァージニア・ウルフの『船出』における自己消去—覗き見とレイチェルの死」(『英語英文学研究—榎田一路先生追悼号』第67巻 51-65) を参照。

<sup>3</sup> 原則、英語引用の日本語訳は適宜既訳を参考にしつつ、筆者自身によるものを用いる。

4 シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における「自己消去」  
——亡霊、理性、カトリシズム

196) という彼女の好みからは、ドクター・ジョンの意識から自身の存在を消そうとするルーシーの姿勢が読み取れる。これもある種の「自己消去」である。

以下の場面はルーシーの窃視者的症状を明らかに示すと同時に、ルーシーの最も劇的な告白を描き出す。

Very good. A dumpy, motherly little body, in decent shawl and the cleanest of possible night-caps, stood before this toilet, hard at work apparently doing me the kindness of 'tidying out' the 'meuble.' Open stood the lid of the work-box, open the top drawer; duly and impartially was each succeeding drawer opened in turn: not an article of their contents but was lifted and unfolded, not a paper but was glanced over, not a little box but was unlidded; and beautiful was the adroitness, exemplary the care with which the search was accomplished. Madame wrought at it like a true star, 'unhasting yet unresting.' I will not deny that it was with a secret glee I watched her. (131)

ラバセクール (Labassecour) にある学校の女性校長であるマダム・ベック (Madme Beck) が、誰の注意も引くことなく、ルーシーの私物を盗み見る中、ルーシーだけが彼女の行動に気付いている。しかし、マダム・ベックの行動を止めるのではなく、ルーシーは彼女の注意から身を隠す。この光景を目撃し、彼女はマダム・ベックの調査技術を褒めたたえるばかりか、「秘密裏の喜び」 ('a secret glee') を感じさえする。窃視者を窃視して興奮する窃視者という奇妙な構図が浮かび上がる。ここにおいて、ルーシーはマダム・ベックと同類であり、マダム・ベック自身も窃視者であるということが明らかになる。

一方で、マダム・ベックが登場時から亡霊のように描写されている点は着目に値する。その描写は以下の通りである。

No ghost stood beside me, nor anything of spectral aspect; merely a motherly, dumpy little woman, in a large shawl, a wrapping-gown, and a clean, trim night-cap.

[...] she had entered by a little door behind me, and, being shod with the shoes of silence, I had heard neither her entrance nor approach [...]. (71-72)

マダム・ベックの亡霊らしさは彼女が履いている「音のしない靴」 ('shoes of silence') で想起される。事実、「彼女は「音無しの靴」を履いて立ち去る。そ

して、そこここを監視し、見張り、鍵穴という鍵穴から覗き見て、ドアというドア越しに聞き耳を立てて、亡霊のように家中をすうっと滑るように移動する」(‘she would move away on her ‘souliers de silence’, and glide ghost-like through the house, watching and spying everywhere, peering through every key-hole, listening behind every door’, 81)。ルーシーは自身の「新しい事物を傍観するという穏やかな欲望」を充足させるために他者を観察し、グレアムのアイデンティティにかんする秘密を保とうとする。一方で、マダム・ベックは他者の秘密を暴きたいという欲望に駆られて他者の生活を監視している。しかし、誰にも見られずに見る、あるいは誰からも注目を浴びずに見るという点で、彼女の監視という行為はルーシーの世界観察と見事に一致する。

登場人物が自身を他者(の視線)から隠し、彼らの生活を観察することを意味する語として「自己消去」を定義した。ルーシーとマダム・ベックの亡霊らしさを皮切りに、「亡霊であること」は自己を消去することと等価であるということではできるだろうか。

『ヴィレット』には、マダム・ベックの家がある土地に伝わる、尼僧の亡霊の物語が挿入される。

A vague tale went of a black and white nun, sometimes, on some night or nights of the year, seen in some part of this vicinage. The ghost must have been built out some ages ago, for there were houses all round now; but certain convent-relics, in the shape of old and huge fruit-trees, yet consecrated the spot; and, at the foot of one—a Methuselah of a pear-tree, dead, all but a few boughs which still faithfully renewed their perfumed snow in spring, and their honey-sweet pendants in autumn—you saw, in scraping away the mossy earth between the half-bared roots, a glimpse of slab, smooth, hard, and black. The legend went, unconfirmed and unaccredited, but still propagated, that this was the portal of a vault, imprisoning deep beneath that ground, on whose surface grass grew and flowers bloomed, the bones of a girl whom a monkish conclave of the drear middle ages had here buried alive for some sin against her vow. Her shadow it was that tremblers had feared, through long generations after her poor frame was dust; her black robe and white veil that, for timid eyes, moonlight and shade had mocked, as they fluctuated in the night-wind through the garden-thicket. (117–118)

そして、この亡霊はルーシーの感情の在り方とも深く結びついている。ルーシーがドクター・ジョンからの「かけがえのない手紙」(‘my precious letter’, 271)を悦びに満ち満ちた様子で「深く、暗く、冷たい屋根裏部屋」(‘the deep, black, cold garret’, 272)でこっそり読むとき、「あの幽霊のようにかすんだ寢室の真

中で全身黒と白の姿」(‘in the middle of that ghostly chamber a figure all black and white’, 273) に遭遇する。その姿はというと「ストレートで細幅の黒いスカートで、頭は巻き布がしてあり、覆われ、白く」(‘the skirts straight, narrow, black; the head bandaged, veiled, white’, 273)、まるであのお化け話にでてくる「尼僧」(‘a NUN’, 273) である。この時、ルーシーは「私の控えめな、抑制した、規律正しき期待には、手紙はとても優しいものに思えた。私の切望し、飢えた思考にはいっそう優しいものに思えた」(‘To my checked, bridled, disciplined expectation, it [my letter] seemed very kind: to my longing and famished thought it seemed, perhaps, kinder than it was’, 273) と悦びの感情を抑制し、手紙を読んでいた。尼僧の亡霊との最も劇的な遭遇は、ルーシーがメトセラの木の下にドクター・ジョンからの手紙を埋めるときである。

Methusaleh, the pear-tree, stood at the further end of this walk, near my seat: he rose up, dim and gray, above the lower shrubs round him. Now Methusaleh, though so very old, was of sound timber still; only there was a hole, or rather a deep hollow, near his root. I knew there was such a hollow, hidden partly by ivy and creepers growing thick round; and there I meditated hiding my treasure. But I was not only going to hide a treasure—I meant also to bury a grief. That grief over which I had lately been weeping, as I wrapped it in its winding-sheet, must be interred. (328)

修道女が生き埋めにされたのと同じ土地で、ルーシーは自身に悦びを与える手紙を、メトセラの木の下にあるぽっかりと空いた穴に埋める。この埋める作業には「宝物を隠す」(‘hiding my treasure’) だけではなく、「悲しみを埋めること」(‘to bury a grief’) も同時に意図されている。悲しみが手紙から得られるのは、マダム・ベックにドクター・ジョンとの秘密裏の手紙のやりとりを盗み見られ、ムッシュ・ポールにも見られた可能性があるからである (326–327)。故に、メトセラの根元への手紙の埋葬というこの行為は、生き埋めにされた尼僧の物語とも相まって、ルーシーに揺らぎを与える感情の生き埋めをも想起させる。ルーシーが手紙を保存しておく容器に「栓か封をして密閉される瓶」(‘a [...] bottle which might be stoppered or sealed hermetically’, 328) を選んだのは、ルーシーに悦びや悲しみを与える手紙が、瓶の中で半永久に朽ちずに生きたまま保存されることを願ってこそではないか。

この一連の感情の埋葬後、またしてもルーシーは「背の高い、クロテンの

ローブを羽織り、雪のようなベールをした女性」(‘a tall, sable robed, snowy-veiled woman’, 329) の姿をした亡霊を目撃し、その正体を暴こうとする。

‘Who are you? and why do you come to me?’

She stood mute. She had no face—no features: all below her brow was masked with a white cloth; but she had eyes, and they viewed me.

I felt, if not brave, yet a little desperate; and desperation will often suffice to fill the post and do the work of courage. I advanced one step. I stretched out my hand, for I meant to touch her. She seemed to recede. I drew nearer: her recession, still silent, became swift. A mass of shrubs, full-leaved evergreens, laurel and dense yew, intervened between me and what I followed. Having passed that obstacle, I looked and saw nothing. I waited. I said,—‘If you have any errand to me, come back and deliver it.’ Nothing spoke or re-appeared. (329–330)

この遭遇においてルーシーと尼僧の亡霊は最も接近した。間近で観察する亡霊は「顔無し」(‘no face’, ‘no features’)ではあるが、ルーシーを見る双眸(‘eyes’)を有している。この不気味さにもかかわらず、ルーシーは一方踏み出し、手を伸ばして亡霊に触れようとする。しかし、亡霊は静かにさっと身を引くばかりである。この亡霊をどのように読むべきか。感情を抑えながら手紙を読んでいたこと、生き埋めにされた尼僧の話と「ルーシーが埋めた手紙」＝「生き埋めにした感情」を思い返せば、この亡霊はまさにルーシーが埋葬／抑圧した感情が持ち主の元にやってきたと読むことはできないだろうか。

「あなたは誰？ どうして私のところにやって来るの？」(‘Who are you? and why do you come to me?’)とルーシーは問うているが、それは亡霊の正体はルーシーが抑圧した感情だからではないか。

一方で、ルーシーが亡霊になる瞬間もある。

He [Graham] could not see my face, I held it down; surely, he *could* not recognise me: I stooped, I turned, I *would* not be known. He rose, by some means he contrived to approach, in two minutes he would have had my secret; my identity would have been grasped between his, never tyrannous, but always powerful hands. There was but one way to evade or to check him. I implied, by a sort of supplicatory gesture, that it was my prayer to be let alone; after that, had he persisted, he would perhaps have seen the spectacle of Lucy incensed: not all that was grand, or good, or kind in him (and Lucy felt the full amount) should have kept her quite tame, or absolutely inoffensive and shadowlike. (504–505)

8 シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における「自己消去」  
——亡霊、理性、カトリシズム

ルーシーはマダム・ベックから阿片を飲まされ、白昼夢の状態で街をさまよ  
い歩いていた。その折、ルーシーはドクター・ジョンを見かけるのであるが、  
自分の正体を彼から隠すように、まるで亡霊の如く(‘the spectacle of Lucy’) そ  
の場から逃げ去ってしまう。まさに、亡霊となり自己を消去しているといえ  
ないか。以下はそのようなルーシーと亡霊の親和性をジネヴラ・ファンショ  
ウ (Genevra Fanshawe) が手紙にて看破する箇所である。

‘Oh, and how did you like the nun as a bed-fellow? I dressed her up: didn’t I do it well?  
Did you shriek when you saw her: I should have gone mad; but then you have such nerves!—  
real iron and bend-leather! I believe you feel nothing. You haven’t the same sensitiveness that  
a person of my constitution has. You seem to me insensible both to pain and fear and grief.  
You are a real old Diogenes. (524)

亡霊の正体がジネヴラであったことに驚くべきであるが、ここで着目したい  
のは亡霊のふりをしたジネヴラが見抜いた、ルーシーが持つ「本物の鉄、ベ  
ンド・レザー」(‘real iron and bend-leather’) のように冷たく、無感で縛られた  
ような「神経」(‘nerves’) である。<sup>4</sup>そのような神経を持っているがために、  
「あなた(ルーシー)は何も感じない」(‘you feel nothing’) し、「私の気質の  
ような人が持つような同じ感性を持っていない」(You haven’t the same  
sensitiveness that a person of my constitution has’) うえに、「私には痛みや驚き、  
悲しみのどれにも無感覚であるように思える」(‘You seem to me insensible both  
to pain and fear and grief’) とジネヴラはまくしたてる。ルーシーが亡霊に無感  
であるのは、亡霊こそはルーシーの生き埋めにした／抑圧した感情であり、  
両者の間に親和性、いやむしろ同一性があるからではないか。

ここまで、ルーシーが持つ窃視者の側面を指摘し、マダム・ベックもまた  
窃視者であることを同時に指摘した。窃視者であることは、人前から姿を  
消し、他者を観察するという意味において「自己消去」と呼ぶことができる。  
しかし、その際に表出したのはマダム・ベックの亡霊のような振舞いあるい  
は人物像である。彼女は亡霊のように音もなく滑り動き、あらゆるものを観  
察／窃視する。ここにおいて、「自己消去」と亡霊が等価値を持つものとして  
浮上してくる。「自己消去」において亡霊的要素を示すのがマダム・ベックだ

---

<sup>4</sup> 厳密には、ジネヴラが亡霊のふりをしたのはただの1度である。



けではなく、ルーシーもまた示していたことが、この等式を成立させるための一打となる。つまり、亡霊になることとは自身の感情の消去（無感覚であること）とつながりがあった点である。つまり、ここで『ヴィレット』における「自己消去」とは亡霊になること（人前から姿を消すこと／感情を消すこと）と指摘することができるのではないか。

## II 理性と「自己消去」

自己＝感情の消去は一体何の作用において実行されるのか。その原因を探るため、ルーシーがドクター・ジョンから手紙をもらえるかどうか煩悶する以下の一節を考察する。

Reason, coming stealthily up to me through the twilight of that long, dim chamber, whispered sedately,—

‘He may write once. So kind is his nature, it may stimulate him for once to make the effort. But it *cannot* be continued—it *may* not be repeated. Great were that folly which should build on such a promise—insane that credulity which should mistake the transitory rain-pool, holding in its hollow one draught, for the perennial spring yielding the supply of seasons.’

I bent my head: I sat thinking an hour longer. Reason still whispered me, laying on my shoulder a withered hand, and frostily touching my ear with the chill blue lips of eld.

‘If,’ muttered she, ‘if he *should* write, what then? Do you meditate pleasure in replying? Ah, fool! I warn you! Brief be your answer. Hope no delight of heart—no indulgence of intellect: grant no expansion to feeling—give holiday to no single faculty: dally with no friendly exchange: foster no genial intercommunion. . . .’

‘But I have talked to Graham and you did not chide,’ I pleaded.

‘No,’ said she, ‘I needed not. Talk for you is good discipline. You converse imperfectly. While you speak, there can be no oblivion of inferiority—no encouragement to delusion: pain, privation, penury stamp your language . . .’

‘But,’ I again broke in, ‘where the bodily presence is weak and the speech contemptible, surely there cannot be error in making written language the medium of better utterance than faltering lips can achieve?’

Reason only answered, ‘At your peril you cherish that idea, or suffer its influence to animate any writing of yours!’

‘But if I feel, may I *never* express?’

‘*Never!*’ declared Reason.

10 シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における「自己消去」  
——亡霊、理性、カトリシズム

I groaned under her bitter sternness. Never—never—oh, hard word! This hag, this Reason, would not let me look up, or smile, or hope: she could not rest unless I were altogether crushed, cowed, broken-in, and broken-down. According to her, I was born only to work for a piece of bread, to await the pains of death, and steadily through all life to despond. (255–256)

擬人化されたルーシーの「理性」はドクター・ジョンとの手紙のやりとりに悦びを見出さないように諫める。自身の感情を表現してはいけない、つまり言語化してはいけないと厳命を下す「理性」は殺伐としている。

ルーシーに厳しく説諭する「理性」について加えて指摘しておきたいのは、この「理性」が ‘hag’ という単語で言い換えられている点である。OEDは ‘hag’ を「女性の姿をした悪霊」(‘An evil spirit [...] in female form)、「死者の亡霊、幽霊」(‘shades of the departed, ghosts’)、「魔女」(‘a witch’)、「醜くぞっとするような老婆」(‘An ugly, repulsive old woman’)である。<sup>5</sup>たしかに、「理性」は亡霊のように「細長く、ほの暗い寝室を通過して [ルーシー] のところへこっそりと忍び寄り」(‘coming stealthily up to [Lucy] through the twilight of that long, dim chamber’)、「ルーシーの肩にしわだらけの手を置き、老人のひやりとする青い唇で霜が降りたように冷たく私の耳に触れて」(‘laying on [Lucy’s] shoulder a withered hand, and frostily touching my ear with the chill blue lips of eld’)、彼女に囁く。この一連の描写には、魔女のように囁きルーシーを魔術的に操ろうとする「理性」、鬼婆のようにしわしわの枯れた手や青くなった唇を持つ

---

<sup>5</sup> OEDによる ‘hag’ の定義は以下の通りである。特に1番 (a と b) から3番 (a) の意味を参照。

1. a. An evil spirit, *dæmon*, or infernal being, in female form: applied in early use to the Furies, Harpies, etc. of Græco-Latin mythology; also to malicious female sprites or ‘fairies’ of Teutonic mythology. *Obs.* or *arch.*

†b. Applied to manes or shades of the departed, ghosts, hobgoblins, and other terrors of the night.

2. A woman supposed to have dealings with Satan and the infernal world; a witch; sometimes, an infernally wicked woman. Now associated with 3.

3. a. An ugly, repulsive old woman: often with implication of viciousness or maliciousness.

ている「理性」、ほの暗い中こっそりと亡霊のように忍び寄る「理性」など、‘hag’がもつ多義性を十分に擬人化された「理性」は体現している。

このように、「理性」が多義性のうちに亡霊であると定義することができるならば、ここにおいて、「理性による抑圧あるいは支配／感情の消去」とはすなわち「亡霊になること」と同義であることが判明するのではないか。さらに言えば、「理性による抑圧」、「亡霊になること」、「自己消去」が同じ線上に位置していると指摘することができるのではないか。なぜなら、この「理性」(＝亡霊)による感情の抑圧の下、ルーシーが人目から自己を消去し、暗闇の中でまるで亡霊のように手紙を読むときにこそ、彼女自身の有様に惹きつけられるように、尼僧の亡霊がルーシーの眼前に出現するからである。

Taking a key whereof I knew the repository, I mounted three staircases in succession, reached a dark, narrow, silent landing, opened a worm-eaten door, and dived into the deep, black, cold garret. (272)

To my checked, bridled, disciplined expectation, it seemed very kind: to my longing and famished thought it seemed, perhaps, kinder than it was. (272)

Something in that vast solitary garret sounded strangely. Most surely and certainly I heard, as it seemed, a stealthy foot on that floor: a sort of gliding out from the direction of the black recess haunted by the malefactor cloaks. I turned: my light was dim; the room was long—but as I live! I saw in the middle of that ghostly chamber a figure all black and white; the skirts straight, narrow, black; the head bandaged, veiled, white.

Say what you will, reader—tell me I was nervous or mad; affirm that I was unsettled by the excitement of that letter; declare that I dreamed; this I vow—I saw there—in that room—on that night—an image like—a NUN. (273)

しかし一方で、「理性」による自己統御は女性が本来持ちえないものであるとルーシーはポーリーナの観察を通して暴露する。

‘This will not hold long,’ I thought to myself; for I was not accustomed to find in women or girls any power of self-control, or strength of self-denial. As far as I knew them, the chance of a gossip about their usually trivial secrets, their often very washy and paltry feelings, was a treat not to be readily foregone. (321)

「自己統制の力」(‘[a] power of self-control’) や「自己否定の力」(‘[a] strength of self-denial’) はまさにルーシーに見出せる理性の作用、すなわち自己消去の作用である。しかし、自身やポーリーナに女性としては珍しく見出せたとしても、その自己統御は、まるで亡霊がすうっと消え去るように、長くは続かない。ただし、ポーリーナはルーシーよりも一枚上手のようである。なぜなら、ルーシーが「理性」に言葉を用いた感情表現を禁止され、それに抗えない一方で、「[ポーリーナ] は言葉の奔流に感情を注ぎ込むことなく感じることができる」([Paulina] could feel, without pouring out her feelings in a flux of words, 322) からである。以下は、ポーリーナが「古いブレトン家の本」(an old Bretton book, 322) を読みながら、幼い頃に共に時を過ごしたグレアム(ドクター・ジョン)との思い出に浸る箇所である。

As she turned the leaves, over her face passed gleam after gleam of expression, the least intelligent of which was a full greeting to the Past. And then she turned to the title-page, and looked at the name written in the schoolboy hand. She looked at it long; nor was she satisfied with merely looking: she gently passed over the characters the tips of her fingers, accompanying the action with an unconscious but tender smile, which converted the touch into a caress. Paulina loved the Past; but the peculiarity of this little scene was, that she *said* nothing: she could feel, without pouring out her feelings in a flux of words. (321–322)

ブレトン家の歴史が刻まれた古い本を通して、グレアムとの思い出、すなわち「過去」(‘the Past’) に視覚と触覚を以て没入しながらも、ポーリーナは一言も発さない。「理性」に感情を表現することを禁じられ、生きながら死しているルーシーに比べると大きな違いである。何も言わずしても感情を自らの内に作り出し、感じることでできるポーリーナは、ルーシーのように亡霊になることはない。

これまで「理性」による感情の抑圧あるいは自己の抑制、すなわち「自己消去」を「亡霊」に結びつけて考察してきた。もうひとつ「自己消去」に関連しているものがある。それはカトリシズムである。

### III 自己消去への反抗——ルーシーとムッシュ・ポール/プロテスタンティズムとカトリシズム

『ヴィレット』において、シャーロット・ブロンテの反カトリシズム的姿勢はよく言及される。<sup>6</sup>例えば、トルメーレンは「シャーロット・ブロンテの小説、とりわけ『ヴィレット』は、多くの読者に不快感を与えてきたローマ教会への一定の敵意をはっきりと表している」(‘Charlotte Brontë’s fiction, especially *Villette*, evinces a degree of hostility to the Church of Rome which has grated on many readers’, 24)、とシャーロットの作品群の中でも『ヴィレット』が有する、際立つ反カトリシズム的要素を強調する。そして、クラーク (Clarke) も引用している箇所だが (967)、ギルバート／グーバーは「一定の読者にとって、『ヴィレット』の反カトリック偏見ほどいらいらさせるものはない」(‘Nothing is more irritating to some readers than the anti-Papist prejudice of *Villette*’, 414) と痛烈に述べている。カトリシズム社会はその父権制ゆえに男性優位社会へとつながる。したがって、『ヴィレット』においては、ルーシーの19世紀における男性優位社会に対する反抗的態度が、一見従順なように見える彼女の振舞いを通して見られるとギルバート／グーバーは指摘している。<sup>7</sup>

---

<sup>6</sup> ジャスパー (Jasper) は1850年10月31日に書かれた、出版業者ジョージ・スミス (George Smith) 宛の「痛烈に皮肉に満ちた手紙」(‘a scathingly ironic letter’) にシャーロット・ブロンテのカトリック嫌いが表れていると述べる (219)。

What if that presumptuous self-reliance, that audacious championship of Reason and Commons Sense which ought to have been crushed out of you all in your cradles, or at least during your school days, and which, perhaps, on the contrary, were encouraged and developed, what if these things should induce you madly to oppose the returning supremacy and advancing victory of the Holy Catholic Church? (ワイズ／シミントン、『ブロンテ姉妹—生涯、友好関係、書簡』第3巻 176)

<sup>7</sup> ギルバート／グーバーは服従を、反抗あるいは自己解放を実現するためのものと位置づける。

But Brontë knew that the habit of submission had bequeathed a vital insight to women—a sympathetic imagination that could help them, in their revolt, from becoming like their masters. Having been obliged to experience themselves as objects, women understand both their need and their capacity for awakening from a living death; they know it is necromancy, not image magic—a resurrecting confessional art, not a crucifying confessional penance—which can do this without entangling yet another Other in what they have escaped. (439–440)

14 シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における「自己消去」  
——亡霊、理性、カトリシズム

このような反カトリシズムにかんする議論をふまえると、当のカトリック社会に属するムッシュ・ポールはプロテスタント社会に属するルーシーにとって、打倒すべき敵のように思えるかもしれない。<sup>8</sup>たしかに、作中に描かれるムッシュ・ポールは決して好印象を与えるような人物ではなく、ルーシーに色々とちょっかいを出してくる。しかし、「自己消去」という観点で本作品を読めば、ムッシュ・ポールは全面的に悪い人物ではないということが明らかになる。なぜなら、ムッシュ・ポールこそがルーシーを「自己消去」から救う人物であるからだ。本節で試みるのは、「自己消去」とカトリシズム、反「自己消去」とプロテスタントイシズムの関連性の指摘である。

---

<sup>8</sup>一方で、ムッシュ・ポールはルーシーの写し絵であり、次のように言う。

‘Bon! I am glad of it. I knew it, somehow; before you told me. I was conscious of rapport between you and myself. You are patient, and I am choleric; you are quiet and pale, and I am tanned and fiery; you are a strict Protestant, and I am a sort of lay Jesuit: but we are alike—there is affinity between us. Do you see it, Mademoiselle, when you look in the glass? Do you observe that your forehead is shaped like mine—that your eyes are cut like mine? Do you hear that you have some of my tones of voice? Do you know that you have many of my looks? I perceive all this, and believe that you were born under my star. Yes, you were born under my star! Tremble! for where that is the case with mortals, the threads of their destinies are difficult to disentangle; knottings and catchings occur—sudden breaks leave damage in the web. But these “impressions,” as you say, with English caution. I, too, have had my “impressions.”’ (407)

以上にムッシュ・ポールが述べ立てるのは、ルーシーと自身の真逆さと「親和性」(‘affinity’)である。ルーシーはまさに自己統御の体現者で「忍耐強く」(‘patient’)、「厳格なプロテスタント」(‘a strict Protestant’)であるが、ムッシュ・ポールは「怒りっぽく」(‘choleric’)、「俗人のイエズス会士の類」(‘a sort of lay Jesuit’)である。しかし、鏡を見てみると、両者の身体面は極めて酷似している。ルーシーのムッシュ・ポールの口説き文句であるが、この両者の同一性はルーシーの「自己消去」を考察する際、重要である。後に詳述する。

まずはルーシーが「自己消去」へ苛立ちを見せる以下の場面を考察する。ジネヴラが尼僧の亡霊のふりをしてルーシーを驚かそうとしたのにもかかわらず、ルーシーが無反応だったことを責めるとき、その苛立ちが現れる。

‘I wonder you are not more flattered by all this,’ she [Ginevra] went on; ‘you take it with strange composure. If you really are the nobody I once thought you, you must be a cool hand.’

‘The nobody you once thought me!’ I repeated, and my face grew a little hot; but I would not be angry: of what importance was a school-girl’s crude use of the terms nobody and somebody? I confined myself, therefore, to the remark that I had merely met with civility; and asked ‘what she saw in civility to throw the recipient into a fever of confusion?’ (341)

ジネヴラはルーシーが「誰でもないこと」(‘nobody’)であることを責める。さらに言い換えれば、‘nobody’は‘none’であり、‘none’とは‘nun’である(Gilbert and Gubar, 428)。つまり、「誰でもないことであること」(「尼僧(の亡霊)であること」)は自己が消去されていることの別言ととることができるだろう。<sup>9</sup>仮に「誰でもない」としても、亡霊のような「冷たい手」(‘a cool hand’)をしており、ルーシーの無感覚さを責め立てている。

しかし、このジネヴラの真っ当な指摘に対して、ルーシーは「私のことを誰でもないって思ってたなんて！」(‘The nobody you once thought me!’)と怒りを示す。ただ、これこそはルーシーの願っていたものではなかったか。自らは「誰でもない」かのように他者の注目を浴びずに、自らの「新しい物事を見るという穏やかな欲望」(‘the calm desire to look on new things’, 120)を満たすために、他者の生活を覗き見る者ではなかったか。亡霊のように家中を滑り歩くマダム・ベックを自らも気づかれることなく「誰でもない」かのように窃視し、その悦びを享受していなかったか。「理性」に身を任せ、感情という自己を抑圧していなかったか。それにもかかわらず、正当な見解を示すジネヴラにルーシーが怒りを露わにするのは一体なぜか。それはおそらく、ルーシー自身が「自己消去」に辟易しているからであろう。このことはムッシュ・ポールとの出会いにより徐々に明らかになる。

---

<sup>9</sup>この言葉遊びは「亡霊であること」と「自己消去」を結びつけ、「自己消去」と「尼僧(の亡霊)であること」を強く結びつける。また、ギルバート/グーバーが「ルーシーは自身の物語を尼僧の物語に読む」(‘Lucy reads her own story in the nun’s’, 410)と指摘しているように、ルーシーと尼僧はやはり同一視できる。

ルーシーはムッシュ・ポールと結ばれる。決して2人の幸せな生活が描かれるわけではなく、異国の地に向かったムッシュ・ポールの生死も不明ではあるが、ルーシー・スノウ (Lucy Snowe) という名前の如く冷たい女性とムッシュ・ポールという嫌味な男性が結ばれるのは、磁石のように、両者が正反対の性質を持っているからこそである。

カトリックであるムッシュ・ポールの印象をルーシーは「彼は、彼なりに、信心深い小柄な人。カトリック宗派の自己否定的で自己犠牲的な部分は彼の魂からの敬意を集めていた」(‘He was a religious little man, in his way: the self-denying and self-sacrificing part of the Catholic religion commanded the homage of his soul’, 227) と語る。カトリシズムが体現するのは、自己否定や自己犠牲といったものである。<sup>10</sup>これまでの議論で示してきたように、ルーシーは自己の存在を抑える人物である。この点を踏まえると、ムッシュ・ポールとルーシーには重なるところがある。一方、ムッシュ・ポールはその真逆の性質も持っており、「思うに望ましい自己統御というものの欠如」(‘that absence of what I considered desirable self-control’, 345) を自身が認めるほどで、「公衆の面前というものはまさに私の構成要素である」(‘publicity is very much my element’, 404) と言うくらいの人物である。この点では、他者の視線から姿を消したいルーシーと他者の視線を浴びたいムッシュ・ポールはまるで氷と炎のように真逆である。したがって、ムッシュ・ポールは「自己消去」と反「自己消去」の側面を兼ね備えた人物といえる。そして、彼のこの後者の側面こそが、「自己消去」に辟易しているルーシーを救うことになる。

例えば、彼が彼女を公衆の面前に晒そうとしていることをルーシーは語る。

It consisted in an unreasonable proposition with which he had before afflicted me: namely, that on the next public examination-day I should engage—foreigner as I was—to take my place on the first form of first-class pupils, and with them improvise a composition in French, on any subject any spectator might dictate, without benefit of grammar or lexicon. (394–395)

---

<sup>10</sup> ルーシーがムッシュ・ポールに見出した「自己否定」の要素は、自己表現を好む彼の性格を考えると見当違いなのかもしれない。ただし、カトリシズムの要素として考えるうえでは、重要である。一方で、「自己犠牲」の側面は彼の本質をたしかに見抜いている。後に触れるが、彼はヴァルラヴァン家 (The Walravens) に犠牲を払っている。



イギリス人であるルーシーをフランス人というマジョリティの前に曝け出すという嫌なことを彼はルーシーに課す。しかし、ムッシュ・ポールの目論見は、完全なフランス語の知識を持っていないルーシーを学生の前に晒し、失敗させて目立たせるという二重苦を課すことである。

I knew what the result of such an experiment would be. [. . .] And this tyrant I was to compel into bondage, and make it improvise a theme, on a school estrade, between a Mathilde and a Coralie, under the eye of a Madame Beck, for the pleasure and to the inspiration of a bourgeois of Labassecour! (395)

「悦びのために」(‘for the pleasure’)、マイノリティであるルーシーは他者の視線の下に失敗させられ、目立たせられて、「ラバセクールブルジョワの感化」(‘the inspiration of a bourgeois of Labassecour’)となる。この失敗し、目立つことについてルーシーは怒る。

On this particular day I was soundly rated. “The obstinacy of my whole sex,” it seems, was concentrated in me; I had an “orgueil de diable.” I feared to fail, forsooth! What did it matter whether I failed or not? Who was I that I should not fail, like my betters? It would do me good to fail. He wanted to see me worsted (I knew he did), and one minute he paused to take breath. (395–396)

ここでルーシーが失敗を恐れるのは、注目を浴びてしまうからである。失敗とは目立ち、他者の「悦び」(‘the pleasure’)に供するもので、「自己消去」が目的とするものとは正反対のものである。しかし、「失敗は私にいいだろう」(‘It would do me good to fail’)と失敗がもたらす効用を期待してもいる。失敗によりルーシーは「誰もいない」(‘nobody’)から脱却できるからである。このようにルーシーが失敗に期待を寄せるのは、「自己消去」にルーシーがうんざりしているからではないか。別言すれば、氷のようなルーシーを溶かす炎がルーシーに内在しているからではないか。この炎の存在を見抜く人物こそ、ムッシュ・ポールである。<sup>11</sup>

<sup>11</sup> 1852年11月6日、出版社のW.S. ウィリアムズ(W.S. Williams)に宛てた手紙の中で、ルーシー・スノウという名前自体がもつ二重性についてブロンテは記している。

‘Petite chatte, doucerette, coquette!’ sibilated the sudden boa-constrictor; ‘vous avez l’air bien triste, soumis, rêveur, mais vous ne l’êtes pas: c’est moi qui vous le dis: Sauvage! la flamme à l’âme, l’éclair aux yeux!’

‘Oui; j’ai la flamme à l’âme, et je dois l’avoir!’ retorted I, turning in just wrath: but Professor Emanuel had hissed his insult and was gone. (352)

「悲しげで、柔順で、幻想にふけっているような」(‘l’air bien triste, soumis, rêveur’) 雰囲気ではあるが、「魂には炎、目には雷が宿っている」(‘a flamme à l’âme, l’éclair aux yeux!’) とムッシュ・ポールはルーシーの本質を看破する。ジネヴラが見抜いたルーシーの「自己消去」という性質の内にある本質を彼は見抜く。つまり、ルーシーは元来、ムッシュ・ポールのように内に炎を宿す人物なのである。故に、「自己消去」に徹しながらも「自己消去」に辟易し、反抗しようとするのではないか。それでは一体、この「自己消去」は何によって引き起こされるものなのか。この原因はカトリシズムに見出すことができるのではないだろうか。以下はルーシーの「自己埋没」ないしは「自己埋葬」(‘self-burial’)、ひいては「自己消去」という宗教にかんするムッシュ・ポールの見解である。

---

As to the name of the heroine, I can hardly express what subtlety of thought made me decide upon giving her a cold name; but at first I called her ‘Lucy Snowe’ (spelt with an ‘e’), which Snowe I afterwards changed to ‘Frost.’ Subsequently I rather regretted the change, and wished it ‘Snowe’ again. If not too late I should like the alteration to be made now throughout the MS. A cold name she must have; partly, perhaps, on the ‘*lucus a non lucendo*’ principle—partly on that of the ‘fitness of things,’ for she has about her an external coldness. (ワイズ/シミニントン、『ブロンテ姉妹—生涯、友好関係、書簡』第4巻 18)

白井が指摘しているところだが、「矛盾した語源説」(‘*lucus a non lucendo*’)、つまり「森は輝かず」の原理が示唆するように、内面に「暖かさ」(だがこれは外面的には感じられない)を有しているから」こそスノウと名付けられた(159)。この二重性のために、ブロンテはスノウをフロストに変更してしまったことを後悔し、再びスノウに修正するよう、ウィリアムズに懇願している。

‘It is your religion—your strange, self-reliant, invulnerable creed, whose influence seems to clothe you in, I know not what, unblessed panoply. You are good—Père Silas calls you good, and loves you—but your terrible, proud, earnest Protestantism, there is the danger. It expresses itself by your eye at times; and again, it gives you certain tones and certain gestures that make my flesh creep. You are not demonstrative, and yet, just now—when you handled that tract—my God! I thought Lucifer smiled.’ (462)

ムッシュ・ポールが見抜くのは「[ルーシーの] 奇妙な、独立独行の、難攻不落の信条で、その影響が [ルーシーを] [中略] みじめなよろいにまとわせている」(‘your strange, self-reliant, invulnerable creed, whose influence seems to clothe you in [...], unblessed panoply) 「宗教」(‘religion’) であり、彼が危険視するのは「[ルーシーの] ひどく、誇り高い、熱心なプロテスタントイズム」(‘your terrible, proud, earnest Protestantism’) である。そのプロテスタントイズムはしばしば「ルーシー」(‘Lucy’) = 「ルシファー」(‘Lucifer’) の目に浮かび、ムッシュ・ポールをぞっとさせる。<sup>12</sup>この目に浮かぶルーシーの本質は以前にムッシュ・ポールが見抜いたあるものを想起させる。それは、「魂には炎、目には雷が宿っている」(‘a flamme à l’âme, l’éclair aux yeux!’, 352) という彼の指摘である。つまり、プロテスタントイズムとは反「自己消去」的なものであることがここにおいて明らかになる。裏を返せば、「自己消去」を体現するのがカトリシズムではないのか。付言すれば、自己を抑圧する宗教こそは『ヴァイレット』が描くカトリシズムである。

ここにおいて、カトリシズムという「自己消去」にルーシーは苦しんでいると改めて指摘できるのではないか。つまり、ルーシーに内在する炎や目に宿る雷としてのプロテスタントイズムを抑えつけるものとしてのカトリシズムへの反抗が読みとれるのではないのだろうか。抑えつけとしてのカトリシズムの本質はムッシュ・ポールの以下の発言に見てとれる。

‘Then you have more need of a careful friend. I scarcely know any one, Miss Lucy, who needs a friend more absolutely than you; your very faults imperatively require it. You want so much checking, regulating, and keeping down.’

This idea of ‘keeping down’ never left M. Paul’s head; the most habitual subjugation would, in my case, have failed to relieve him of it. No matter; what did it signify? I listened to

<sup>12</sup> よく知られているように、Lucy は Lucifer の愛称である。

him, and did not trouble myself to be too submissive; his occupation would have been gone had I left him nothing to ‘keep down.’ (402–403)

本来プロテスタントであるルーシーに欠けているのは、「抑制、規制、抑えつけ」(‘checking, regulating, and keeping down’) というカトリシズムの特性である。ルーシーが抑えつけなければならぬものとは自身のプロテスタンティズムであり目に浮かぶ「ルシファー」である。つまり、本来は自己表現をしたい自己を抑圧しなければならないのである。

そして、この特性は後にルーシーが「理性」の作用により、獲得するものであった。それは「私の控えめな、抑制した、規律正しき期待には、手紙はとて優しいものに思えた。私の切望し、飢えた思考にはいっそう優しいものに思えた」(‘To my checked, bridled, disciplined expectation, it [my letter] seemed very kind: to my longing and famished thought it seemed, perhaps, kinder than it was’, 273) とドクター・ジョンからの手紙を読むときに働いた、感情を抑制する「理性」の作用であり、ルーシーを亡霊化する「理性」の作用である。

ここで、「自己消去」とカトリシズムのつながり、反「自己消去」とプロテスタンティズムのつながりが見えてきたように思われる。しかし、カトリシズムが自己表現を許さないものであるとするならば、思い返さなければならないのは、ムッシュ・ポール自身は自己表現を好む人物であることである。これは、以前に指摘したように、「望ましい自己統御と思われるものの欠如」(‘that absence of what I considered desirable self-control’, 345) がムッシュ・ポールにはあり、「公衆の面前というものはまさに私の構成要素である」(‘publicity is very much my element’, 404) と彼が言うところに明らかである。

以上のことを考えると、ムッシュ・ポールはルーシーに「理性」のように自身の感情の抑えつけ、つまり「自己消去」を強要するが、本質的にはプロテスタント、反「自己消去」に位置する人物といえる。つまり、ムッシュ・ポールは「自己消去」(カトリシズム)と反「自己消去」(プロテスタンティズム)を体現する人物となる。ルーシーへの愛に加えて、彼のこの後者の側面が、ルーシーを人前に出して失敗させることで目立たせるようなことをし、ルーシーをカトリシズム(=「自己消去」)から解放しようとしているのではないか。

#### IV 亡霊であることからの脱却

これまで、ルーシーの「自己消去」を「亡霊」、「理性」、「カトリシズム」に結び付けて考察してきた。この三者は「自己消去」を起点に「亡霊」＝「理性」＝「カトリシズム」とそれぞれ等しく結ぶことができる。なぜなら、「自己消去」とは「亡霊」になることであり、この亡霊化は「理性」によって成し遂げられ、この「理性」とは主体に抑えつけを命じる「カトリシズム」であるからだ。そして、ルーシーは「カトリシズム」＝「自己消去」を体現する人物かと思われたが、そうではなく、反「自己消去」＝「プロテスタンティズム」を体現しようとする人物として描かれている。この「カトリシズム」からの脱却、「自己消去」への反逆に手を貸すのがムッシュ・ポールである。

しかし、今一度「亡霊」に着目し、次のような問題提起をしたい。つまり、亡霊であることとは「自己消去」でありながら反「自己消去」を体現しているのではないだろうか、という問いである。なぜなら、亡霊とは人前に出現し、注目を浴びる存在でもあり、誰からも気づかれることのない存在という相反した性質を備えているからである。言い換えれば、可視性と不可視性を兼ね備えた存在である。この亡霊の特性を考慮すれば、ルーシーにとって亡霊であることは「自己消去」と反「自己消去」をそれぞれ実現する折衷案といえることができるだろう。

そのような生の世界をさまよひ歩く死の存在からルーシーを蘇生させる一言がムッシュ・ポールから掛けられる。この言葉はムッシュ・ポールが西インドへ出向く前にルーシーに掛けるものである。

Adherent to his own religion (in him was not the stuff of which is made the facile apostate),  
he freely left me my pure faith. He did not tease nor tempt. He said:—

‘Remain a Protestant. My little English puritan, I love Protestantism in you. I own its severe charm. There is something in its ritual I cannot receive myself, but it is the sole creed for “Lucy”’ (545)

プロテスタンティズムはルーシーを「ルーシー」(‘Lucy’) たらしめる「唯一の信念」(‘the sole creed’) であることをムッシュ・ポールは看破する。ここでプロテスタンティズムを「自己消去」(カトリシズム) への反抗と読めば、ムッシュ・ポールはルーシーを抑圧するカトリシズム＝理性から救う一言をかけているといえることができる。「プロテスタントのままであれ」(‘Remain a Protestant’) と言い、「あなたの内にあるプロテスタンティズムを愛している」(‘I love Protestantism in you’) と告白するムッシュ・ポールは、「自己消去」に抗うルーシーに自分のままであれ、つまり「埋葬された生」(‘the buried life’)

から脱却せよ、と反「自己消去」の立場から救いの言葉をかけているのである。つまり、彼の叫びはルーシーを「自己消去」＝「カトリシズム」から解放する愛に満ちたものであり、亡霊という呪縛から解く魔術的な一言なのである。

しかし、ルーシーは自身を救うこの魔術的一言を掛ける愛人からも解放されようとする。

And now the three years are past: M. Emanuel's return is fixed. It is Autumn; he is to be with me ere the mists of November come. My school flourishes, my house is ready: I have made him a little library, filled its shelves with the books he left in my care: I have cultivated out of love for him (I was naturally no florist) the plants he preferred, and some of them are yet in bloom. I thought I loved him when he went away; I love him now in another degree: he is more my own. (545)

ムッシュ・ポールが異国の地に行って3年が経過する。「M. エマニュエルの帰還が決定した」(‘M. Emanuel's return is fixed’)と報告しているが、帰還が果たされたかは曖昧なまま物語は閉じている。ムッシュ・ポールの生死は読者に委ねられたままであるが、いずれにしろ着目したいのは、ルーシーがムッシュ・ポールの不在をむしろ好意的に受け止めている点である。ルーシーはムッシュ・ポールのために書斎を拵えたり、植物を植えたりしているが、「彼が行ってしまったとき彼を愛していたと思いました。よりいっそう今、彼を愛しています。彼は私自身以上のものなのです」(‘I thought I loved him when he went away; I love him now in another degree: he is more my own.’)と述べる。愛する人から離れている方が愛を感じるというアンビヴァレンスである。これはギルバート／グーバーの『ヴィレット』の曖昧な終結はルーシーの両面価値、つまりポールへの愛と、彼女自身の力を行使するために十分に努力することができるのは、ポールの不在においてのみという彼女の認識とを反映している」(‘The ambiguous ending of *Villette* reflects Lucy's ambivalence, her love for Paul and her recognition that it is only in his absence that she can exert herself fully to exercise her own powers’, 438) という指摘に帰結することができるだろう。自分が自分であるためには、ムッシュ・ポールから離れていなければならない。女性としての自己実現を目指すための、つまり自身の「自己消去」を終わらせるための男性からの「自己消去」である。

ムッシュ・ポールはかつて思いを寄せていたジュスティーン・マリ (Justine Marie) の死後、ヴァルラヴァン家 (The Walravens) の面倒を見ていた。このムッシュ・ポールの自己犠牲ぶりはヴァルラヴァン夫人が「彼ほどの人はいやしなかったよ。耐えられる以上の責を自身に課すようなね。進んで必要のない責任を負うなんてさ」 ('There never was a man like him for laying on himself burdens greater than he can bear, voluntarily incurring needless responsibilities', 439) と評するほどである。とすれば、ルーシーを「自己消去」から救うために、彼女のもとを一時あるいは永遠に離れるというのは、自己犠牲を是とするムッシュ・ポールの最後の自己犠牲である。この点では、彼はやはりカトリックである。

## 結

『ヴィレット』において、「自己消去」と呼ばれるべき現象はルーシーの亡霊であろうとする姿勢に見出せる。そして、ルーシーの場合、この亡霊であることには感情の消去、すなわち理性による心の抑制が伴っている。「理性」によるこの抑制の問題こそはプロテスタンティズムとカトリシズムに起因しており、それぞれ反「自己消去」としてのプロテスタンティズムと「自己消去」としてのカトリシズムと言い換えることができる。このように読めば、『ヴィレット』はルーシーの「カトリシズム=自己消去 (=「埋葬された生」)」からの脱却が描かれていると指摘することができはしないか。言い換えれば、「自己消去」という概念を『ヴィレット』に導入することにより、ルーシーのカトリシズムへの反抗が「自己消去」への反抗を通して違ったように読み解くことができたのではないか。つまり、酷評されることが多いムッシュ・ポールはルーシーを「自己消去」=「カトリシズム」から救う者と読み直すことも可能であり、ルーシーとムッシュ・ポールが結ばれることに一定の好意的な説明を与えることができるのではないだろうか。ただし、ルーシーは「自己消去」から解放されるためにムッシュ・ポールからも「自己消去」を行う。

最後に、ウルフとの関連を指摘すれば、奇しくも「自己消去」という現象は『船出』におけるレイチェルを手がかりに、ブロンテの作品にも見出せた。すなわち、「自己消去」という現象あるいは概念は小説を読む際のひとつの鍵となり得るのではないだろうか。ただし、どのように「自己消去」が描かれるかは作家あるいは作品次第である。

## 引用文献

- Brontë, Charlotte. *Villette*, edited with an Introduction and Notes by Helen M. Cooper, Penguin, 2004.
- Clarke, Micael M. “Charlotte Brontë’s ‘Villette’, Mid-Victorian Anti-Catholicism, and the Turn to Secularism.” *ELH*, vol. 78, no. 4, winter 2011, pp. 967–89.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. “The Buried Life of Lucy Snowe.” *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Veritas paperback edition, Yale UP, 2020, pp.339–440.
- “Hag, n.1.” *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. 1989.
- Jasper, David. “Religion.” *The Brontës in Context*, edited by Marianne Thormählen, Cambridge UP, 2014, 217–223.
- Naremore, James. *The World Without a Self: Virginia Woolf and the Novel*. Yale UP, 1973.
- Thormählen, Marianne. *The Brontës and Religion*. Cambridge UP, 1999.
- Wise, Thomas James, and J. A. Symington, editors. *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence*. Porcupine P, 1980. 4 vols. Originally Published by Blackwell, 1933.
- Woolf, Virginia. *The Voyage Out*, edited with an Introduction and Notes by Jane Wheare, Penguin, 1992.
- ギルバート、サンドラ M・グーバー、スーザン『屋根裏の狂女—ブロンテと共に』山田晴子・藺田美和子訳、朝日出版社、1986年。
- 白井義昭『シャーロット・ブロンテの世界—父権制からの脱却』増補版、彩流社、2007年。
- ブロンテ、シャーロット『ヴィレット（上・下）』青山誠子訳、みすず書房、1995年。